

[学会]

第619回 千葉医学会例会・第二内科例会

日 時：昭和54年12月22日

会 場：千葉大学医学部附属病院第1講堂

1. 急速進行性糸球体腎炎を中心とした腎疾患に対するパルス療法

○柳沢孝夫, 繩田泰史, 高林克日己
秋元敏佑, 野崎忠信, 富岡玖夫
(千大)
金井英夫, 末石 真 (川鉄)
土田弘基 (千葉社会保険腎臓内科)

急速進行性糸球体腎炎を主とした腎疾患5例に対し、プレドニゾロンにてパルス療法を行ない、3カ月の観察期間で、腎機能高度障害例2例で血中クレアチニンの著減、全例で尿蛋白の50%以上の減少をみた。前後で腎生検を行なった2例では組織学的活動性の著明な改善をみた。急速進行性糸球体腎炎にても早期に強力な治療がなされれば、臨床的にも組織学的にも改善は可能であることが示唆された。

2. CNS ループスに対するパルス療法

○金井英夫, 末石 真, 篠宮正樹
森崎信尋, 永瀬佳子, 鈴木泰俊
明星志貴夫, 佐藤重明, 有賀 光
(川鉄)
繩田泰史, 高林克日己, 柳沢孝夫
秋元敏佑, 野崎忠信, 富岡玖夫
(千大)

中枢神経症状を呈した全身性エリテマトーデス (CNS ループス) の3症例に対してプレドニゾロンによるパルス療法を行ないその結果を報告した。本療法により、臨床症状の改善、血清補体値、抗DNA抗体及び髄液中IgGなどの正常化が得られた。本療法は従来のステロイド療法で難治であった CNS ループスに対して有効な治療法となると考えられた。

3. 難治性高脂血症の臨床研究

篠宮正樹, 森崎信尋, 永瀬佳子
金井英夫, 末石 真, 鈴木泰俊
明星志貴夫, 佐藤重明, 有賀 光
(川鉄)
桑島敏江, 鈴木伸子, 加藤徳太郎
(同・検査室)
佐々木憲裕 (千大)

高コレステロール血症の中には難治性のものがある。難治性の高コレステロール血症は、虚血性心疾患または高コレステロール血症の家族歴を有するものに多く、この中には、アキレス腱肥厚や腱黄色腫で特徴づけられる家族性高コレステロール血症と呼ばれる疾患があり、若年で虚血性心疾患をおこしてくる。このように、高コレステロール血症の治療には、遺伝的影響のつよいものと環境の影響のつよいものとを区別してゆく必要がある。

4. 柏地区における高血圧の臨床疫学的研究

平井愛山, 三上恵只, 伊藤国明
田中真, 篠崎幸一 (国立柏)

高血圧症の治療体系の整備を目標として、今日の降圧剤を中心とした高血圧療法の問題点を第一線の医療機関のレベルで見直しをした。調査対象は千葉県柏地区の医師会会員28名が設ける診療所へ54年8月15日~9月30日の間に受診した新患及び再来の高血圧患者1078名で、高血圧の治療方法と各種合併症、血中脂質、電解質、尿酸等との相関をみたところサイアザイド剤に由来からいわれる K^+ ↓, 尿酸 ↑ に加え HDL コレステロール低下作用のあることがみとめられ今後降圧剤と脂質代謝についての研究の必要性があるようになった。

5. 髄膜炎に SIADH を合併した3例

齊藤陽久, 長谷川浩一, 中村和之
(旭中央)

SIADH によると思われる低 Na 血症を合併した髄膜炎の3症例を報告した。いずれの症例も、髄膜炎の改善

と共に、低 Na 血症の改善を認めたが、同時に抗利尿ホルモンの不適合分泌があたかも適正化されたかの如くに考えられたので、若干の文献的考察を加えて報告した。

6. 急性前骨髄球性白血病の2剖検例

○王 伯銘, 五十嵐忠彦, 田原和夫
市毛勢津子, 杉浦ゆり, 浅井隆善
藤岡成徳 (千大)
馬場雅行 (同・第一病理)
家本陽一 (同・第二病理)
鈴木和夫 (辰巳病院)

症例1: 74歳, 男。出血傾向を主訴に入院。DIC を伴った APL と診断。治療開始前に脳出血にて死亡。症例2: 33歳, 男。出血傾向を主訴に入院。DIC を伴った APL と診断。ヘパリン投与, 化学療法施行するも脳出血にて死亡。<剖検所見> 症例1: APL (浸潤: 諸リンパ節, 脾, 腸管, 皮膚), 肝癌, 肝硬変症, 右側頭葉血腫, 右半球クモ膜下出血, 腎糸球体線維素血栓症。症例2: APL (浸潤: 脾, 小腸), 肺出血, うつ血, 右側頭葉出血。

7. 興味ある経過をとった IgA myeloma の1例

伊藤国明, 田中 真, 三上恵只
平井愛山, 篠崎幸一 (国立柏)
王伯銘, 藤岡成徳 (千大)

初診より症状検査値変動なく, 2年後急性増悪死亡した IgA-K 骨髄腫の一例。56歳, 女, 昭和52年4月軽度腰痛あり, 理学的所見なし, Hb 10.4g/dl, 骨髄形質細胞12.2%, IgA 2230mg/dl, Bence-Jones 蛋白(-), 骨病変(-), 8カ月後 Stage I として治療 (Cyclophosphamide) するも反応なし, 一年後 Hb 7.7g/dl と進行, Stage II として治療するも反応なし, 二年後貧血増悪 IgA 急増, 骨髄形質細胞85.5%となり, うつ血乳頭肋骨骨折も生じ, 化学療法血漿交換行なうも死亡。

8. 腹部超音波検査法の現況と展望

笠貫順二, 宮平守博, 徳政義和
(千大)

腹部超音波検査は電子スキャン装置 (特にリニアタイプ) の開発, グレイスケール表示による画質の改善により急速に普及している。当教室でも本年3月より本法を臨床にとり入れ, 12月まで147例に施行し, 胆石例18例の他, 総胆管嚢腫, 胆嚢ポリープ, 膵癌, 悪性リンパ腫, 後腹膜腫瘍, 腹直筋内血腫等, 多種の疾患の診断に

有効であった。症例を供覧し本法の有用性を述べたが, 今後胃と腸以外の腹部疾患の形態学的ルーチン検査は本法が主となると思われるがさらにレ線検査, 穿刺細胞診, 薬理学的検査等の併用による精密検査法としても有効であると思われる。

9. 低蛋白血症を呈した小腸クローン病と思われる1症例

鈴木 豊 (八千代中央病院)
笠貫順二, 宮平守博, 西川哲男
浜崎智仁 (千大)
大島仁士 (松戸市立)
大久保春男 (船橋中央)

我々は最近低蛋白血症による全身浮腫を主症状とし大腸X線検査にて回腸にクローバ状の奇異な変形をきたしたクローン病と思われる症例を経験したので, 若干の文献的考察を加えて報告した。症例は49歳女性, 胸腹水もある全身浮腫, 貧血あり。逆行性回腸二重造影にて下部回腸のケルクリングヒダの消失変形狭窄像あり, 大腸ファイバースコピにて, 回腸末端に浅い潰瘍及びその口側に線状癒痕を認めた。サラゾピリン治療により低蛋白血症, 貧血, 赤沈の改善が認められた。

10. ステロイドホルモンが著効を呈したリンパ管拡張症の1例

宮平守博, 笠貫順二, 徳政義和
(千大)
大島仁士 (松戸市立)
鈴木 豊 (八千代中央病院)

23歳女性。全身浮腫と下痢を主訴に入院。総蛋白, アルブミン, γ -グロブリンの低下とコレステロール, トリグリセライドの上昇。

23歳女性。全身浮腫と下痢を主訴に入院。総蛋白, アルブミン, γ -グロブリンの低下と α_2 グロブリンの増加とIII型高脂血症を認めた。¹³¹PVP による蛋白漏出試験で3%と異常を示し, 小腸鏡による小腸糖脱生検組織像では, 粘膜表面直下より粘膜下層までのリンパ管が著明に拡張, リンパ管造影では胸管開口部での狭窄及び胸管の拡張を認めた。1日尿蛋白は0.7g以下であった。プレドニン 60mg により蛋白は正常に復した。